

[論 文]

## 建国期韓国における教科書研究

—国語科教科書・戦時教材を中心に—

건국기 한국의 교과서 연구—국어과 교과서·전시교재를 중심으로—

A Study on Korean Language and Wartime ('Jeonsi') Textbooks in South Korea during the Government Establishment and Korean War Period

朴 貞 蘭

Park Jeongran

### はじめに

解放直後の南朝鮮<sup>1</sup>は、米軍政庁の管轄下に置かれ、様々な改革が行われた。とりわけ、教育再建は重要な課題であったが、国語科教科書開発や制作に関しては、朝鮮語学会に委託している<sup>2</sup>。米軍政庁の依頼を受けた朝鮮語学会は、国語学者及び教育関係者で「教材編纂委員会」を構成し、解放後初の中等国語科教科書である朝鮮語学会編著『中等国語教本』(上・中・下)などの国語科教材を発行する。この『中等国語教本』は、1948年の建国前後に存在した左右対立という混乱した状況の中で、左右作家のテキストがともに掲載されるなど、斬新な教科書であった。しかし、日本帝国の朝鮮総督府編『中等教育朝鮮語及漢文読本』と重複する教材も数多く、「国民精神涵養」を目標とする国家イデオロギーを直接的に反映していることは、植民地朝鮮時代における帝国主義の原理をそのまま継承していたという「連続性」の問題が考えられる<sup>3</sup>。

他方、1948年の大韓民国樹立や1950年の朝鮮戦争勃発とともに、韓国の国語科教科書における国家イデオロギー教育はますます強化されていくが、新国家が誕生するとともに、国語科も『教本』時代から『中等国語』『中学国語』の時代を迎えることになり、形式編制には変化が見られるようになった。しかし、テキストの内容編制においては、戦時中のアメリカを中心とした「国際連合韓国再建委員団 (UNKRA)」の支援の影響から親米的な傾向が見られるテキストが増え、初代大統領の李承晩や初代文教部長官の安浩相が主張したファシズム的傾向を持つ政治理念である「一民主義」意識の下に置かれ、「人民」が

<sup>1</sup> 1945年の解放後から1948年に大韓民国政府が樹立する前までは、南朝鮮と呼んでいた。なお、周知のように、北朝鮮の場合は、1948年9月に朝鮮民主主義人民共和国が樹立する前までは、ソ連軍によるソ連軍政下におかれた。

<sup>2</sup> 朝鮮語学会は解放直後、緊急臨時総会(1945年8月25日)を開き、国語教育界が直面した至急の当面課題であった教科書制作(及び教師養成)と辞典編纂事業を展開することを決議した。

<sup>3</sup> 建国期韓国における国語科の「連続性」の問題については、拙書『「国語」を再生産する戦後空間—建国期韓国における国語科教科書研究』(三元社、2013年)をご参照いただきたい。

「国民」へとすりかえられるなど、国語科教科書は、国家の政治理念を教育するイデオロギー装置の役割を果たしていったと見られる。

本稿では、このような建国期韓国における国語科教科書の諸問題を、1948年の大韓民国誕生、そして1950年の朝鮮戦争勃発を基点とし、その特徴と変化を考察していきたい。そして、韓国の教育界においてもほとんど紹介されてこなかった朝鮮戦争期における『飛行機』、『軍艦』、『我々は必ず勝つ』、『たくましい我が民族』、『我々も戦う』などの戦時教材を紹介し、朝鮮戦争期における戦時教材の実態を考える。ここでは、建国期の教科書の特徴について検討する前に、まず中等国語科教科書の刊行を時期別に簡単にまとめておきたい。

## 1 建国期における教科書政策の変遷

建国期の国定中等国語科教科書の政策は、米軍政期（1945～1948年）、政府樹立期（1948～1950年）、朝鮮戦争期（1950～1953年）、朝鮮戦争・戦後期（1953～1955年）に大きく区分される。

米軍政期の中等国語科教科書の開発は2回にわたって行われている。最初は、軍政庁学務局の依頼で朝鮮語学会が『中等国語教本』上・中・下の3冊を刊行し、次は「教授要目」（1947年）が制定されてから1948年に文教部によって『中等国語』1・2・3が刊行された。1947年に刊行された『中等国語教本』の下巻は、1948年10月20日付けの版本が存在しているが、この事実から米軍政期においては朝鮮語学会編纂教科書と文教部編纂教科書が一緒に使用されたことがわかる。

政府樹立以後の教科書政策は、1949年教育法制定以後の教科書検認制度及び国定教科書図書編纂規程により変化を迎える。米軍政期の教科書検認制度は、「学務局編修課→文教部編修局」の業務であったが、「3年の間、総334件が出願され174件が検認定」<sup>4</sup>された。当時の編修局の発行課長であった田鎮成は、「教科書の内容が雑で急速に多量の教科書制作が行われ体系的な検認定が難しかったため、国定教科書の開発及び整備が必要だ」<sup>5</sup>と指摘している。こうした状況の中で、政府樹立以後、1949年に教育法が制定・公布される。1950年4月29日には、大統領令として「国定教科用図書編纂規程」<sup>6</sup>が公布され、同時

<sup>4</sup> 発行課長であった田鎮成は、教科書検認定を実施する趣旨について、「公正なる立場からもっとも教育的である教科書を採択使用させようとする意図から出たものである。文教部の独自のものに固執するより、むしろ学界の熱烈な協調でもっと大きい効果が期待できる。したがって、多くの教科書が各々の特色を持って誕生されることを願っており、それがわが国の教育向上に大きく貢献できると信じている」と述べている。また、新しく作られる教科書は、文教部の新しい教育目標—民主教育・民族教育—具現のために明朗で愛国的な教科書でなければならないと主張した（田鎮成「教科書検認定について」『新教育』第1巻第3号、大韓教育連合会、1948年、44～45頁。引用は、韓国精神文化研究院編『韓国教育史料集成1 現代編』ソニイン、2002年、232～233頁）。

<sup>5</sup> 田鎮成、同上論文、1948年、44～45頁。

<sup>6</sup> 『官報』1950年4月29日、第340号。

に「教科用図書検定規程」<sup>7</sup>も公布される。この2つの規程により、この時期以降の教科書開発は、国定体制と検認定体制が明らかに区分されるようになる。

次に、朝鮮戦争期の教科書開発については、制度上の変化は見られない。中等教育の場合、学制改編による教科書開発が必要であったが、戦時体制という時代状況の中で、教科書の開発は自由に行われることができなかった。そのために、朝鮮戦争期の教科書は、「国際連合韓国再建委員団（UNKRA）」の紙支援により出版され普及された。また、朝鮮戦争期の教科書は、互いに異なる学年・学期の教科書であっても、その内容が重なった場合もあり、重複した内容に「補充教材」という名称がついた形態の教科書も多くみられる。このような状況のため、戦時の教科書発行の状況は、全体的には把握されていない。しかし、朝鮮戦争期の『中等国語』と『高等国語』が各学年別に、1学期用と2学期用の2冊ずつ発行され、1951年から1953年初まで、これらの教科書が使用されたことは明らかにされている。

【表1】建国期における中等国語科教科書

時 期	開発主体	発行権	学 制	種 類
米 軍 政 期	朝鮮語学会	軍政庁文教部	中等6年	教 本 3
	文 教 部	文 教 部	中等6年	中 等 国 語 3
政 府 樹 立 期	文 教 部	文 教 部	中等6年	中 等 国 語 6
朝 鮮 戦 争 期	文 教 部	文 教 部	中等3年	中 等 国 語 3 学年－学期別6
			高等3年	高 等 国 語 3 学年－学期別6
朝 鮮 戦 争 ・ 戦 後 期	文 教 部	文 教 部	中等3年	中 学 国 語 3 学年－学期別6
			高等3年	高 等 国 語 3
第1次教科課程期	文 教 部	文 教 部	中学3年	中 学 国 語 3

出典：ホ・ゼヨン「建国期の中等国語教科書研究—国定教科書を中心に—」『語文研究』第33巻第3号、韓国語文研究会、2005年、472頁。

最後に、朝鮮戦争後も教科書発行は、制度上には大きな変化は見られない。これは、教科書の開発よりも戦後復旧と再建がこの時期の主要課題であったからである。しかし、中学校の国語科の場合は、『中等国語』から『中学国語』へ、高等学校の場合は、学年－学期別教科書から学年別教科書への変化が見られる。さらに、『中学国語』の場合、以前まではなかった単元別編制がこの時期の大きな特徴である。また、『高等国語』は、第1次教科課程が制定・公布されて、新しい教科書が開発される前の1956～1957年までは、課別

<sup>7</sup> 大統領令第336号、1950年4月29日。

編製の教科書が使用された。【表1】は、建国期に開発・発行された中等国語科教科書である。

他方、当時の文教部調査企画課が発行した『文教行政概況』には、教科書編纂の基本方針が書いてあるが、国語科の場合、「もっとも正確な国語として、固有文化を継承し、創造・発展させる。……国語科編纂委員会を開き、教科書編纂の規範を定め、児童が持つべき国家観念、国民道徳、家庭責任、学校教育、人倫道徳、情緒教育、体育保健、科学常識、商業経済などの内容が含まれた教材を選択し、編纂方針を立てた」<sup>8</sup>と述べられ、当時の国語科は、固有文化の継承、国家観念・国民道徳から科学・商業経済に至るまでの総合的な内容の教材が求められていたことがわかる。

それでは、次節では建国期を、米軍政期、政府樹立期、朝鮮戦争期、朝鮮戦争・戦後期の4期に区分して、国語科教科書の特徴について考察していきたい。

## 2 米軍政期における国語科教科書

### 2-1 朝鮮語学会編著『中等国語教本』(上・中・下)の登場

米軍政期の教育は、米軍政の管轄下におかれ改革が行われていた。ただ進駐した米軍は、民政への移譲を準備した人々ではなく戦闘部隊であったため、朝鮮の教育をどのようにして再建するののかについて具体的な計画は持っていなかった。日本帝国の植民地から解放された状態であったことで、米軍政は、ただ「日本式教育を清算し、アメリカ式民主主義理念を積極的に導入し進める程度」<sup>9</sup>であり、教材の体制・内容の問題などを考慮する余力は持っていなかった。そのため、親日やその他のイデオロギーなどの問題には、相対的に無関心であった。それは、1945年11月14日、「朝鮮教育審議会」の第9分科として「教科書」を定め、崔鉉培、趙潤濟などの担当要員を選任したことから確認できる。趙鎮満や黄信徳のような親日人士が、教育改革担当者として選ばれていた事実は、当時の米軍政が朝鮮における教育の具体的な方向と指針を持っていなかったことを意味する。それは、政策決定者が革新的で根本的な決定を下すより、当面の問題を「ただ対処していく (muddling through)」<sup>10</sup>形態であったといえる。その結果、この時期以後の韓国教育は親日問題が浮上し、一方、右翼の民族教育と全体主義的な色彩を帯びようになる。

米軍政期の国語科教科書にみられる特徴として、「教本」の登場が挙げられる。前述したように、解放直後には『初等国語教本』(1945年11月)、『中等国語教本』(1946年9月)、『新中等作文教本』(1948年1月)など、「教本」というタイトルの教科書が主流であった。これは、植民地期に存在していた「読本」と同類の教材であったため、米軍政庁は、日本帝国主義式の「読本」のイメージから脱するとともに新しさを与えることを意識し、「教

<sup>8</sup> 文教部調査企画課『文教行政概況』文教部、1947年、39～41頁。引用は、イ・ジョング『韓国の教科書変遷史』大韓教科書株式会社、2008年、129頁。

<sup>9</sup> パク・ホグン『韓国教育政策とその類型に関する研究』高麗大博士論文、2000年、64頁。

<sup>10</sup> パク・ホグン、前掲論文、2000年、75頁。

本」という名称を使用する<sup>11</sup>。また、軍政庁は「教本頒布式」<sup>12</sup>を行うなど、この「教本」教科書に力を入れていた。解放とともに教育に対する国民の関心と需要が高まる中、米軍政庁は早い段階でその対策を立てざるを得なかった。それで、臨時に朝鮮語学会の研究者に力を借り書籍を発行、その書籍を教科書として普及することとなる。このような状況は、軍政庁学務局が国語教材を発行する1947年まで持続された。たとえば、『ハングル初歩』（1945年11月）、『初等国語教本』（1945年12月～1946年5月）、『中等国語教本』（1946年9月～1947年5月）、『ハングル教授指針』1集（1945年12月）、2集（1946年1月）は、すべて朝鮮語学会が編纂したものである。これらは米軍政庁学務局が発行権を移譲し、朝鮮教学図書株式会社で印刷・普及した主要教材であった。こうした「教本」は、「教本頒布式」の後に続々と発行され、「教授要目」が制定（1946年11月）される前にすでに普及され、教育現場で使用されている。したがって、これらの「教本」教科書には、「教授要目」における「話すこと・聞くこと・読むこと・書くこと」のような言語活動が反映されることはなかったといえる。むしろ、「教授要目」の方が、これらの「教本」教科書を、教育内容とレベル、教育方法の基準として参考したとまで言われている<sup>13</sup>。

【表2】建国期における国語科教科書の教材数及び領域

教科書名	特徴	総教材数	筆者数			教授要目の領域						
			1回	2回以上	合計	課別						合計
						読む	話す	書く	作文	文法	文学(史)	
中等国語教本 上・中・下	課別	160	84	17	101	64	0	1	5	4	86	160
中等国語 1～3	課別	145	80	18	98	62	0	0	13	7	63	145
中等国語 ①～⑥	課別	233	134	31	165	96	0	0	2	22	113	233
中等国語 1～3	課別	110	89	14	103	41	0	0	9	4	56	110
中学国語 1～3	単元別	103	78	16	92	50	0	0	4	5	44	103

出典：ホ・ゼヨン「建国期の中等国語教科書研究—国定教科書を中心に—」『語文研究』第33巻第3号、韓国語文研究会、2005年、473頁より作成。1. 論説文や説明文のような場合は1つとして、文学作品は個別作品ごとに1つとして数えた。2. 筆者の数は、無署名の場合があるので、1回+2回以上+無署名とすると総数になる。3. 「教授要目」の領域である「話す—聞く、読む、作文、文法、文学(史)」で分析した。

<sup>11</sup> ユン・ヨタク他『国語教育100年史I』ソウル大学校出版部、2006年、349～350頁。

<sup>12</sup> 1945年11月20日。米軍政庁学務局の第1会議室において、「軍政長官」と当時編修局長であった崔鉉培、趙潤済などの関係者40名が参加し、「国語教本頒布式」が行われた。教科書を受け取った軍政長官が、国民学校の男子生徒と女子生徒に贈呈する象徴的な式であった。ユン・ヨタク他、同上書、2006年、350頁。

<sup>13</sup> ユン・ヨタク他、同上書、2006年、351頁。

【表2】でわかるように、「教授要目」で設定されている中等国語科教育の領域である「話す—聞く、読む、書く、作文、文法、文学(史)」が、各教科書においては体系的に具現されていなかった。これは当時の国語科教科書が「教授要目」を反映していなかったことを証明している。

1955年、第1次教科課程が制定されてから、イ・ウンベクは、「教科書が備えるべき条件」<sup>14</sup>を提示し、「建国期の教科書は、国語科教科書が備えるべき条件は満たしていなかった」と指摘している。イ・ウンベクが指摘した、言語活動や単元別編制を意識した教育は、中学校の場合、1953年発行の教科書からみられるようになるが、この時期も実際には「読む」領域に偏っている。なお、1956年以降の第1次教科課程から提示されている言語活動中心の教育は、1956年発行の教科書からである。

米軍政庁から教科書制作の依頼を受けた朝鮮語学会は、素早く総会を開き、国語学者及び教育関係者の20名で「教材編纂委員会」<sup>15</sup>を構成する。この執筆委員は、李熙昇、李崇寧、張志暎、李浩盛、その他、審議委員は、趙潤濟、崔鉉培、李克魯であったが、朝鮮語学会が民間の団体であったために、当時の教科書制作は、官と民の協力で行われていたと評価されている。しかし、この「教材編纂委員会」の委員は、いずれも官(権力者側)と関係があり、以後国定教科書の編纂者や著者として活動するなど、民間団体でありながら官とは密接な関係にある団体であった。以下は、朝鮮語学会著『ハングル教授指針』に載っている「国語教本編纂について」の一部である。

「国語教本編纂について」<sup>16</sup>

本会では、今回暫定的国語教育の臨時措置として、まず京城の初等、中等、専門の各学校教育家、その他専門家の共同協力により、以下のような3種類の教本を編纂した。

1. 初等国語教本 上(1・2学年用)、中(3・4学年用)、下(5・6学年用)

<sup>14</sup> 「教科書が揃えるべき要素」：「①国語科教育の目標を十分に達成できるように、資料を集成しなくてはならない。②言語の文化財と言語活動という両面を取り上げ、統合的にまとめて良いし、文学編・言語編とに分けても良い。③国語科教科書は、単元別にまとめる。④教科書が唯一の資料である我々の現実からは、基本単元においては、もっとも重要なものを取り上げ、その他の補充単元を付録として、また独立させて学習効果の発展に貢献できるようにした方が良い。⑤主に普段辞典に出ていない特殊なものに限る。また研究の方向を提示するいくつかの問題をつける必要がある」(イ・ウンベク『国語教育研究会報』第3号。引用は、ホ・ゼヨン「建国期の中等国語教科書研究—国定教科書を中心に—」『語文研究』第33巻第3号、韓国語文教育研究会、2005年、474頁)。

<sup>15</sup> 1945年9月2日に「教材編纂委員会」を構成し、以下を実行。①一般用「ハングル入門」を編纂、②初・中等用国語教材編纂、③「ウリマル」講師養成のための短期講習会の開催。朴鵬培『改訂版 韓国語教育全史 上』大韓教科書株式会社、1992年(初版は1987年)、1992年、518頁。

<sup>16</sup> 朝鮮語学会(著作者)・軍政庁学務局(発行者)『ハングル教授指針』朝鮮教学図書株式会社、1945年12月30日、1～3頁。

2. 中等国語教本 上（1・2学年用）、中（3・4学年用）、下（5・6学年用）
3. ハングル初歩（初等3学年以上、各学年と中等各学年『国語教本』学習入門用）

当時、国語科を総括していた人物は、李秉岐である。李秉岐は1930年、「朝鮮語綴字統一案」が発表された際に制定委員として活動し、1935年には朝鮮語標準語査定委員になる。また1939年には、『嘉藍詩調集』を発売、『文章』の創刊号に「恨中録註解」を発表するなど古典研究に精進するが、1942年の「朝鮮語学会事件」<sup>17</sup>のため咸興刑務所に収監された。1943年に起訴猶予で出獄した後、帰郷して古文献研究に邁進するなど、解放後、「学問的にも社会的にも編修官を任せるのに適切な人」<sup>18</sup>とされた。当時の状況を記録した李秉岐の『嘉藍日記』を見ると、中等教科書の編修主任に委嘱された後、実務委員を構成するために、朝鮮文化建設協会の李源朝に会って、相談していることがわかる。

中学校の国語教科書は、私が編修の主任となり、初等・中等、その他の国語教科書の編修に関する討議をするために文化建設協会の李源朝君に会った。李君に相談したら、もうすでに色んな文化団体とこの問題について話し合い、建議文を作成していると言う。その建議文をみたら、私の考えと一致したので合意した。またその他に、委員5人の推薦をお願いした<sup>19</sup>。

こうして李秉岐は、李源朝から林和、金南天、李泰俊、朴魯甲を推薦されるが、この中で李泰俊を「中等国語起草委員」の一人として選任する。以下は、教本の起草委員と審査委員として選任されたメンバーである。

【表3】「国語教本」の起草・審査委員

教科書名	起草委員
『初等国語教本』	尹福栄、尹聖容、李浩盛（責任）
『中等国語教本』	李崇寧、李泰俊、李熙昇（責任）
『ハングル初歩』	張志暎、尹在千、梁柱東、李世楨、鄭寅承（責任）
審査委員	方鍾鉉、趙炳熙、朱在中

出典：朝鮮語学会（著作者）・軍政庁学務局（発行者）『한글교수지침（ハングル教授指針）』朝鮮教学図書株式会社、1945年12月30日、3頁。

<sup>17</sup> 朝鮮語学会の主要会員33人が、1942年から1943年にかけて治安維持法違反として検挙された事件である。朝鮮総督府は、朝鮮語学会の学術活動を独立運動とみなしたのである。そのことは、1943年の予審終結決定文において、朝鮮語学会を「表面文化運動ノ仮面ノ下ニ朝鮮独立ノ為ノ実力養成団体」と表現していることから明確である（安田敏朗『近代日本言語史再考Ⅲ 統合原理としての国語』三元社、2006年、242頁）。

<sup>18</sup> カン・ジンホ「反共イデオロギーと「国語」教科書—「教授要目期」の「国語」教科書を中心に—」、カン・ジンホ他『国語教科書と国家イデオロギー』グルヌリム、2007年、150～151頁。

<sup>19</sup> イ・ビョンギ「1945年11月2日付日記」『嘉藍日記Ⅱ』シング文化社、1976年、562～563頁。

李泰俊は、当時朝鮮文化建設中央協議会の幹部であった。李秉岐とは植民地時代から文芸誌『文章』を主宰するなど親密な関係を持つ仲で、作家としても有名な人物だった。李秉岐は、李泰俊に朝鮮語学会の李崇寧と李熙昇を組ませ、「中等起草委員（執筆委員）」として選任する。

李崇寧は、1933年、京城帝大文学部を卒業した後、解放とともにソウル大学文理大の教授に、李泰俊は朝鮮文学家同盟に変更された朝鮮文化建設中央協議会の副会長に、李熙昇は1942年の朝鮮語学会事件で投獄された後、李崇寧と同様、解放後にソウル大学文理大の教授になった人物である。彼らは3人とも、民族主義的な傾向がもっとも強い人々であったが、中でも李泰俊が左翼系文壇の幹部であることは注目すべきである。この3人が編修した教科書は、民族主義的な特徴を持った左翼系と右翼系人士の作品がバランス良く採択された構成となっていた。古典作家と外国人を除いた筆者は、上巻に25名、中巻に24名、下巻に12名であり、2編以上が載った人を除けば、44名が1つ以上の文章を載せていることになる。彼らの中で左翼系として分類された人（「越北」した人も含め）は、朴泰遠、鄭芝溶、李箕永、李泰俊、趙明熙、李源朝、金起林、洪命熹、林和、呉章煥、イ・ビョン Cholなどの11名で、全体の4分1を占めている。それでは、次節で、朝鮮語学会編『中等国語教本』における左右合作という特徴について検討してみたい。

## 2-2 左右合作の国語科教科書

国語教育界は、解放直後教育界における一般的な対立構図の中にはおかれていなかった。国語教育界においても、左右対立が表れるのは単独政府樹立が可視化されてからである。それは、当時国語教育界の主導権を握っていた朝鮮語学会が、「自分たちの任務はハングル普及と国語教育にあるのみで、政治には不偏不党する」<sup>20</sup>と決議したことからもわかる。また、ナム・ミンウによると、上記のように国語教育界が、当時の教育界における政治化とは異なる様子を見せたのは、朝鮮語学会の活動によるものであり、その直接的な活動の原因となるのが、「教科書制作」と「辞典編纂」という事業から確認できると指摘している。ここでは「教科書制作」の側面から考えておきたい。【表4】は、『中等国語教本』に掲載された左翼系作家による教材である。

1949年になって中等教科書に採択された「左翼文学者作品問題（9月18日）」が、首都警察庁・文教部から指摘<sup>21</sup>される。1945年から1949年の前半までは、国語教科書編纂委員会の内部において、左翼系文学者による作品の採択は、何の問題もなかった<sup>22</sup>。しかしな

<sup>20</sup> イ・ウンホ『米軍政期におけるハングル運動史』ソンチャン社、1974年、207頁。

<sup>21</sup> 李秉岐は日記で、「国語教科書編纂委員会」と関連した記録を残しているが、主に漢字廃止に関する論争である。また、左右関係なく教科書編纂に関して協力を得ていたが、1949年になって、李秉岐自身の朝鮮文学家同盟との関係問題（7月9日）、中等教科書に採択されている左翼文学者の作品問題（9月18日）が首都警察庁と文教部広報処から指摘をされたと書かれている（イ・ビョンギ『嘉藍日記II』1945～1950年の日記、シング文化社、1976年）。

<sup>22</sup> ナム・ミンウ「米軍政期国語教育界の構造と意味研究」『国語教育学研究』第24輯、国語教育学会、2005年、281頁。

がら、このような左右合作の教材作りが、米軍政庁の干渉なしに可能だったのだろうか。これは朝鮮語学会のメンバーの多くが、学務局の編修課長、編修官、初等教育課長に就任したこと、また「朝鮮教育審議会」の第4分科（初等教育）、第9分科（教科書）の委員としても参加していることと関係している。とりわけ、「朝鮮教育審議会」の第9分科は、各国定教科書の審議を担当していた。既述したように、崔鉉培、張志暎などが参加していたことは、国語科教科書の制作・発行過程において、朝鮮語学会関係者の関与を証明している。

【表4】朝鮮語学会『中等国語教本』に採択されている左翼系作家とテキスト

上巻	初の夏（朴泰遠、随筆）、ナマクシン（イ・ビョンチョル、詩）、蘭（鄭芝溶、詩）、ウォント（李箕永、小説）、海村日誌（李泰俊、日記）、驚異（趙明熙、詩）、秋（李秉岐、現代詩調）、八月十五日（李源朝、論説）、郷愁（金起林、詩）、オンドルと白衣（洪命熹、説明文）、お兄さんと火炉（林和、詩）
中巻	石塔の歌（呉章煥、詩）
下巻	貴方たちお帰りになられて（鄭芝溶、詩）、礼儀（李万珪、論説）、手紙（李泰俊、手紙）、水（李泰俊、随筆）、扶余に行く途中で（李秉岐、紀行文）、アチャ山（李秉岐、紀行文）、緑陰愛誦詩（鄭芝溶、詩）、懐郷（李源朝、随筆）、死者を想いながら（洪命熹、追悼文）、美しい風景（朴泰遠、随筆）、建蘭（李秉岐、随筆）

出典：ナム・ミンウ「米軍政期国語教育界の構造と意味研究」『国語教育学研究』第24輯、国語教育学会、2005年12月、280頁をより作成。なお、ゴシック体は「越北」した作家であるが、金起林・鄭芝溶は「拉北」とされている。

しかし、単独政府が樹立する1948年に入ってから、その様相が変わっていく。国語教育界の改革が朝鮮語学会によって左右されることに不満を持った団体が1948年4月26日に創立される。それが、趙潤済中心の「国語教育研究会」であった。「国語教育研究会」は、創立総会とともに、第1回の研究発表会を開催、同年10月31日には、国語教育の専門学術雑誌である『国語教育』を創刊するなど、国語教育改革の理論的拠点を確保しようとした。趙潤済は、「国語はわれわれの命である」という民族主義的な国語教育観を主張し、国語教育が言語使用機能（言語活動）教育に走ることを批判していた<sup>23</sup>。また、単独政府樹立後、趙潤済の推薦で国語科の編修官となった洪雄善<sup>24</sup>によれば、「国語教育研究会に参加した人々は、趙潤済の京城師範学校時代の弟子たち」であった事実からも、この団体の性格がどのようなものであったかは想像できる。また、『国語教育』の創刊号に祝賀メッ

<sup>23</sup> また漢字廃止論に関しても、漢字は古典的文化遺産であることから、漢字廃止・綴り方・横書き問題など、朝鮮語学会側の意見だけを認めることは偏った判断だと批判した。

<sup>24</sup> 洪雄善「ドナム先生と私」『文学 ハングル』第6号、1992年、157～164頁。

セージを送った人は、文教部長官の安浩相<sup>25</sup>、国会議長の申翼熙<sup>26</sup>、右翼文化団体である全国文化団体総連合会の副会長の朴鐘和<sup>27</sup>らであって、政治的な左右対立が国語教育界にまで浸透していったことがうかがえる。

1949年になって、中等国語教科書に採択されていた左翼系文学者による作品問題が、文教部から指摘されることになり、1949年の後半から、彼らの作品はその姿を消していく。こうして大韓民国政府樹立後は、朝鮮語学会の独自の左右合作路線は断絶し、政治的対立構図に支配されるようになる。

### 2-3 朝鮮語学会編著『中等国語教本』上・中・下（1946年9月～1947年5月）

既述したように最初に発行された中等教材であった『中等国語教本』上・中・下（1946年9月～1947年5月）<sup>28</sup>は、『初等国語教本』とともに、朝鮮語学会が開発した6年制中学校の正規国語教科書である。上・中・下の3巻3冊となり、朝鮮教学図書株式会社で印刷、軍政庁学務局から発行された。なお、この教科書は課別編制となっており、各課には学習問題が付けられている。まず、この教科書の内容編制は、次のとおりである。

1. 上巻は、1、2学年用で、1946年9月1日に発行され、定価は25ウォン。169頁、53教材で構成された。
2. 中巻は、3、4学年用で、1947年1月10日に発行され、定価は30ウォン。199頁、

<sup>25</sup> 安浩相「……教育朝鮮の建設において国語の教育は、もっとも重要な問題である。……解放後のわが教育は、……国語に重点をおき、一日も早く国民にとって国語の崇高な志を理解させ、……民族精神を高揚させなければならない。』『国語教育』創刊号、1948年10月、4頁。引用は、韓国精神文化研究院編『韓国教育史料集成3 現代編』ソニン、2002年、249頁。

<sup>26</sup> シン・イクヒ「……我々が今日すべての部門にわたって、民主主義、民主化を高唱し、教育においても「新教育」や「民主教育」などと呼ばれていることも、当然な現象であります。そうしたら、「新教育」や「民主教育」が当面している課業は、何であろうか。一つ、日帝の残滓の除去であり、わが民族の本来の精神力の回復であり、世界人としてもっとも普遍的人間教育をすると同時に特殊的な民族的思想・感情を啓発し、国民としての生活と教養を陶冶させることにあります。……国語教育を高度に強調し、これを向上発展させることは、国民としての、民族としての使命を完遂する基礎が確立することであり、……、「国語教育」の創刊は、実に新生大韓民国の誕生とともに、新文化建設の一大推進であります。』『国語教育』創刊号、1948年10月、4～5頁。引用は、同上書、250～251頁。

<sup>27</sup> パク・ジョンファ「……われわれは、五千年の文化民族であったことに着眼し、真に民族的国語教育を研究育成し、新国家に大きく役立てることを願っている。』『国語教育』創刊号、1948年10月、7頁。引用は、同上書、252頁。

<sup>28</sup> 「教本」より先立って教育されたのは、『ハングル初歩』（1945年11月）である。これは、一般人を対象とした文字学習の代表的な教材であるが、この本を終えてから「教本」に進むことができた。『ハングル初歩』の「注意」事項として「1. この本は『初等国語』（中・下）もしくは『中等国語』（上・下）を教える前に、国語勉強の基盤を整えるよう教えるためのものである」と明記されている。

40教材で構成された。

3. 下巻は、5、6学年用で、1947年5月17日に発行され、定価は55ウォン。175頁、28教材で構成された。

【表5】は、『中等国語教本』の教材様式を分類したものである。教材の様式をみると、読本中心の性格が明確で、詩（現代詩と現代時調）、随筆、伝記文、手紙などの文学作品の他、演説文、説明文、伝記文、論説文などが多く選定されていたことがわかる。

こうした建国期の国語科教科書に採択されている説明文、論説文、伝記文などの様式は、国民国家の楽観的な未来像を提示し、その未来に向けて努力すれば希望に満ちた国家が形成されるというイデオロギーを持続的に注入するツールとして利用された。しかし、これは、植民地的メカニズム、すなわち帝国主義が必然的に持っていた特徴をそのまま継承している。帝国主義が追求した未来への楽観や啓蒙などが、建国期においてもあからさまに採択された。たとえば、説明文に用いられた主なテキストは、近代的科学文明を紹介し、近代的文明の発展を間接的に受容しながら、帝国主義の原理を肯定する教材となっている。こうした近代的科学技術を通じた展望は、国家の近代性を涵養すると同時に西洋の啓蒙言説をそのまま受容している。

【表5】『中等国語教本』の教材ジャンル

様式	日記	作文	手紙	紀行文	感想文	随筆	追悼文
上	1	1	2	1	5	12	1
中	0	0	2	5	1	8	1
下	0	0	0	1	0	2	0
合計	1	1	4	7	6	22	2
様式	詩歌	時調	小説	説明文	論説文	伝記文	伝説
上	7	3	0	4	12	2	2
中	5	2	0	7	7	1	1
下	4	2	1	6	11	1	0
合計	16	7	1	17	30	4	3

出典：『中等国語教本』上・中・下より作成。各巻の教材数は、上巻：53、中巻：40、下巻：28、合計：121。

なお、「国民精神涵養」を目的として、国家イデオロギーを直接に反映している論説文も多くみられる。これらの論説文では、国家に貢献する主体として「青年」を設定し、青年の徳目として、勤勉と誠実、そして共同体意識を強調しながら、青年は学ぶことに努力をするよう力説している。また、国民が持つべき教養として、衣食住や衛生に関する知識を強調する論説文も多く取り入れられた。このような主題は、とりわけ近代に入り、新しい国家を建設する段階で多く登場する傾向があるが、これは国民形成の最初の段階であるとされた。教科書を通じて学習する主体は、共同体の一員として認識された。国民が身に

つけるべき基本素養を教育することによって国家形成の基礎を整えようとした意図であるといえる。

### 3 政府樹立期における国語科教科書

#### 3-1 「教本」時代から「国語」時代へ

『中等国語教本』は、中学校と高等学校とで使用されていた教材であった。しかし、1948年から発行されることになる『中等国語』において、1952年度以前の教材は中学校・高等学校用として、その以後のものは中学校用として発行され<sup>29</sup>、その種類が分けられる。

ここで注目すべきことは、『中等国語』が『中等国語教本』を基に修正・補完されたことである<sup>30</sup>。このように『中等国語教本』は、内容面において、韓国における中等学校用の国語科教材の原型となったといえる。【表6】でわかるように、米軍政期の『中等国語』1～3は、その前に発行されている『中等国語教本』を41%も継承している。『中等国語』①～⑥は、『中等国語教本』に対しては11%、『中等国語』1～3に対しては18%となっている。しかし、朝鮮戦争期の『中等国語』、朝鮮戦争・戦後期の『中学国語』が『中等国語』①～⑥と一致する比率は、39%、78%に至る（しかも、不明となっている『中等国語2-II』がカウントされていないことを考慮した場合、その一致度はさらに高くなるだろう）。米軍政期の『中等国語教本』や『中等国語』1～3の内容構成が、政府樹立期の『中等国語』①～⑥で大幅に変わり、その後の教科書は、この『中等国語』①～⑥を継承していることがわかる。このように、内容構成においては、政府樹立期の『中等国語』①～⑥を継承しているが、しかし、形式上の編制において変化が見られるようになったのは、1953年発行の『中等国語』からである。

【表6】各教材別内容の一致度（単位%）

教科書名	『中等国語』 1～3	『中等国語』 ①～⑥	朝鮮戦争期 『中等国語』1～3	『中学国語』 1～3
『中等国語教本』上・中・下	41	11	11	11
『中等国語』1～3		18	17	15
『中等国語』①～⑥			39	40
朝鮮戦争期・『中等国語』1～3				78

出典：ホ・ゼヨン「建国期の中等国語教科書研究—国定教科書を中心に—」『語文研究』第33巻第3号、韓国語文研究会、2005年、475頁より作成。同一筆者による同一教材の文章を採択している程度を示す。中等国語2-IIは不明のためカウントされていない。

<sup>29</sup> 1952年からは、高等学校用の『高等国語』が別途に発行されることになる。

<sup>30</sup> 『中等国語教本』上・中・下と『中等国語』1～3の目次比較は、ユン・ヨタク他、前掲書、2006年、359～364頁。

### 3-2 「一民主義」と国語科教科書

3年間にわたった米軍政による教育行政は、1947年6月から新しい政府を発足させるための「過度政府」体制が維持される状態であったが、1948年8月の大韓民国の樹立とともに全般的な秩序を承継する。1948年7月17日に憲法が、翌年の1949年12月31日に教育法が制定・公布され、新しい教育の基盤が整えられた。李承晩政権が、権力を維持するために展開したのが「一民主義」であった。「一民主義」が施行されることで、思想への統制がますます強化され、社会は反共の雰囲気硬直化していった。1948年に国家保安法が制定され、教育界においては左翼系教師と学生に対する弾圧が大々的に実施され、すべての学校で学生委員会が設置され、左翼運動に参加した教師と学生の行跡を当局に報告するよう強要された<sup>31</sup>。

政府樹立期の『中等国語』①～⑥の特徴は、右翼系中心の政治性が一層強化されたことである。左派系の知識人の多くが「越北」し、南朝鮮だけの単独政府を樹立しなければならなかった状況において『中等国語教本』の4分の1に該当した左翼系作家の教材は、当然のことながら削除されるしかなかった。この過程において右翼系人士が組織的に介入したことが確認できる。当時、編修業務を担当した編修官は、崔台鎬と洪雄善であった。崔台鎬が1948年から1963年まで、洪雄善が1948年から1961年まで国語科編修業務を担当したが<sup>32</sup>、彼らが中心となり、政府樹立期の国語科教科書を編纂したと考えられる。編修官の崔台鎬は、教科書を作る過程において、右翼系人士の「全国文化団体総連合会の総会において決議された建議文」<sup>33</sup>を反映しなければならなくなり、彼らの意思により「左翼作家たちを追い出す施策」<sup>34</sup>を作成することとなった。こうした状況の中で『中等国語』①～⑥は誕生したのであった。

この一連の過程を先頭で指揮した人物が、文教部長官の安浩相と國務総理の李範奭であった。安浩相は、李範奭が組織した「朝鮮民族青年団」の幹部だったが、李範奭の推薦で文教部長官になれた人物であった。文教長官に就任した安浩相は、文教政策の当面課題として、国内的には李承晩の統治イデオロギーであった自由民主主義を確固たるものとし、国外的には共產主義と対抗し国土と思想の分裂を統一することを掲げ、その一環として、「学徒護国団」を創設した。「学園内における左翼勢力の画策を粉碎し、民族意識の鼓吹を通じて愛国的な団結心を涵養する」<sup>35</sup>という趣旨で結成された学徒護国団は、「一民主

<sup>31</sup> ハン・ジュンサン、ジョン・ミスク「1948～1953年における文教政策の理念と特性」『解放前後史の認識4』ハンギル社、1989年、348～350頁。

<sup>32</sup> 「1 崔鉉培（1945～？）、2 李秉岐（1945～1946）、3 チョン・ヨンテク（1945～？）、4 パク・チャンヘ（1945～1948）、5 崔台鎬（1948～1963）、6 洪雄善（1948～1961）……」（ジョン・ジュンソプ「表50 国語科における歴代編修業務担当者」『国語科教育課程の変遷』大韓教科書株式会社、1996年、274頁）。

<sup>33</sup> チェ・テホ「編修秘話」『教壇』第39号、1970年3月、13頁。

<sup>34</sup> 同上。

<sup>35</sup> ハン・ジュンサン、ジョン・ミスク、前掲論文、1989年、352頁。

義」を實踐する先鋒隊であった<sup>36</sup>。

『中等国語』①～⑥に掲載されている安浩相の教材は、「知ること」(②、77～88頁)、「学生と思想」(③、41～48頁)、「仕事と幸せ」(④、91～95頁)、「人生の目的」(⑤、84～89頁)の4教材で、すべて、「一民主義」を擁護し、李承晩を中心に一致団結すべきとの内容である。要するに、指導者を中心に一致団結する時こそが「一民主義」を實現し、共産主義を打破できるという内容である。「学生と思想」では、共産主義と物質主義(唯物論)を批判し、「民族主義思想に徹底」することを求めている。しかし、ここでも民族主義を求めているながらも、共産主義を批判し、南の指導者を中心に一つになるべきとする内容の「一民主義」を擁護していることがわかる。他方、李範奭の教材も、一層右翼傾向の強い内容となっている。たとえば、民族を救済できるのは青年しかいないという内容の「青年の力」(④、118～120頁)、日本帝国と戦っていた独立運動を回顧した「青山里の戦い」(①、134～144頁)、青年の団結を訴えた「青年に告げる」(⑤、41～46頁)と「民族と国家」(⑥、74～79頁)などが挙げられる。

こうした「一民主義」の痕跡は、朝鮮戦争期の教科書まで多く残されていた。たとえば、「一民主義」理論家の孫晋泰も、朝鮮戦争期における教材であった「一民主義」(『中等国語1-1』大韓教科書株式会社、1953年3月、『中学国語1-II』大韓教科書株式会社、1955年9月)の中で、「一民主義」は、その起源を壇君思想や「弘益人間」の理念であるとし、三国時代の高句麗の「尚武精神」<sup>37</sup>や新羅の「花郎」精神<sup>38</sup>を継承しているとした。このように、「一民主義」とは、韓国人すべてが壇君の子孫であることや古代国家の精神を継承していると述べ、その「血(統)の純粋性」<sup>39</sup>について強調したものであったが、他方、こうした「一民主義」意識は、「一つの民族の言語と慣習の共同性を中心に大同団結して、民族主義の体制を整える」<sup>40</sup>ことから、帝国側のみならず、植民地朝鮮の知識人による民族主義議論を連想させるとの指摘もある。

林志弦<sup>41</sup>によると、植民地朝鮮における民族主義に対する議論は、血縁主義的な色彩が濃厚であるが、この意識は、19世紀啓蒙運動期における血縁的な同胞観が、日本から導入

<sup>36</sup> 同上。

<sup>37</sup> 尚武精神：文武の中で、文に偏らず武を大切にする主義のこと。高句麗は、尚武精神を生活化し、隋の100万大軍や唐の30万軍に対し勝利を導き、この尚武精神は、民族や国家の基盤を整え、強大国として発展させる原動力であると教えられた。DAUM国語辞典(<http://dic.daum.net/word/view.do?wordid=kkw000134719&q=%EC%83%81%EB%AC%B4>)を参照。

<sup>38</sup> 花郎徒：新羅時代、花郎を中心とした青少年の修練団体。団体精神がもっとも強い青少年の集団として教育的・軍事的・社交団体的な機能を持っていた。世俗五戒(事君以忠・事親以孝・交友以信・臨戦無退・殺生有忤)が、花郎の精神的な基底であった。DAUM百科事典(<http://100.daum.net/encyclopedia/view.do?docid=b25h2144b>)を参照。

<sup>39</sup> イ・ピョンジョン「『一民主義』というファシズムと政治的叙事性研究」『韓国文学研究』第28輯、東国大学校韓国文学研究所、2005年6月、206頁。

<sup>40</sup> ソ・ジュンソク『李承晩の政治イデオロギー』歴史批評社、2005年、15頁。

<sup>41</sup> イム・ジヒョン「韓半島民族主義と権力談論：比較史的問題提起」『当代批評』10号、当代批評編集部、2000年、186～195頁。

された「民族」という翻訳語と同一視され、血統は民族の最も本質的な構成要素として理解されたからであった。当時の大半の民族主義者が共有していた血縁的「民族」概念は、有機的民族理念と結合し、民衆は主体ではなく民族を構成する対象としてのみ存在するようになった。植民地朝鮮において、いわゆる文化的民族主義者は、朝鮮民族の固有の言語と文化を通して、歴史的かつ文化的な民族の実体を発見するのに心血を注ぎ、朝鮮の文化的優越性を掲げて、日本の物質的優越性に立ち向かうことができる対抗理論を作ろうとした。しかし、こうした文化的民族主義は、ヘゲモニー運動としての民族主義という観点からみれば、朝鮮エリート民族主義者らが植民地権力と対立する中で、自分たちのヘゲモニーを確保するための方法に過ぎなかったことになる。このようなエリート民族主義の意識は、解放後にも、再生・反復されることになり、「一民主義」という「ファシズム的傾向を持つ政治理念」<sup>42</sup>として再生産されていった。

なお、『中等国語』の①、④、⑤巻において、親中の内容の教材と親米的な教材が混在している点は興味深い。前者としては、「上海サッカー遠征記」(①、77～86頁、李容一)、「北京の印象」(④、7～14頁、丁来東)があり、後者として、「アメリカ通信」(⑤、19～23頁、金載元)がある。北京に留学して思った印象を記録した「北京の印象」と、上海に遠征したサッカー選手の善戦過程を紹介した「上海サッカー遠征記」には、中国に対する憧れと友好の心理が描かれており、国立博物館長である金載元の「アメリカ通信」も、同様である。これは、中国で共産党政権が樹立した1949年10月以前に書かれた文章とみられるが、この時期までは、中国はわれわれに「解放を約束し、プレゼントとして独立」をもたらしてくれたありがたい国の一つとして理解していた米軍政期以来のまなざしが、そのまま維持された<sup>43</sup>。中国に関する教材は、朝鮮戦争が勃発した後に発行される教科書から削除されていくが、これは、中国が朝鮮戦争に介入した後、敵国として規定されたことがわかる。しかしながら、ソ連に関してはこの時期から強い敵対感を見せている。安浩相の「学生と思想」(③、41～48頁)では、ソビエトの非協調のために、世界の平和が成し遂げられておらず、「ソ連の崇拜者と信奉者は……、ソ連の唯物主義と共産主義、すなわち唯物思想と共産思想に、自分たちの思想と精神が余地なく征服され支配されているからだ」(47頁)などと言及し、ソ連に対する強い敵愾心がうかがえる。このことから、この時期を支配していたのは冷戦イデオロギーではあったが、その対象がソ連にあってまだ中国や北朝鮮にまでは拡大されていないことがわかる。このように、政府樹立期の教科書は、右翼系民族主義者の国家主義的な言説が多くみられるが、崔台鎬編修官の回顧にあるように、「その時の反共体制は今日想像もできないほど温いものであり、政府の施策も落ち着いていなかった」<sup>44</sup>といえる。こうした混在した様子は、1950年6月の朝鮮戦争の勃発とともに変わり、戦争時の教科書では、反共・親米意識がより明確になっていく。

既述のように、建国期における国語科教科書は、米軍政期、政府樹立期、朝鮮戦争期、朝鮮戦争・戦後期と区分できる。1950年6月、朝鮮戦争勃発のため、1950年4月以後から

<sup>42</sup> イ・ピョンジョン、前掲論文、2005年6月、199頁。

<sup>43</sup> カン・ジンホ「反共イデオロギーと「国語」教科書」、前掲書、2007年、166～167頁。

<sup>44</sup> チェ・テホ、前掲論文、1970年、13頁。

1952年3月までの制作時期に空白が見られる。この時期の国語科教科書は、朝鮮戦争期の戦時教材として作成されていた。朝鮮戦争中盤以後（1952年3月～1954年9月）にも、戦時教材は発行されていくが、戦時期教科書の奥付をみると、教科書の定価が定められていないものもあるし、発行に際しても「大韓教科書株式会社」だけでなく「教学図書株式会社」などの出版社においても印刷されていたことから、戦時期における教科書発行の混乱していた状況がうかがえる。

## 4 朝鮮戦争期における国語科教科書

### 4-1 朝鮮戦争期における教育課程

朝鮮戦争が起きた時点から、1951年1・4後退までは、韓国での教育課程の運営は、全廃の状態であった。すべての学校の授業が中断され、政府も首都を釜山に移すほどであった。その中で、1951年2月25日、文教部では「戦時下教育特別措置要綱」を制定・公布することになった。これにより、避難学生が避難地の臨時学校で授業を受けることになる。この「特別措置要綱」は、戦争が長期化する場合に備えた教育方針であると同時に、一連の教育内容を示した「非常計画案」でもあった。「戦時下教育特別措置要綱」<sup>45</sup>は、次の8つの項目からなる。

- 1) 避難学生の修学督励：避難地（釜山）所在学校に登録し学業を継続させる。
- 2) 仮教室、避難特設学校の設置：教室難を解決するために教科別履修時間制を実施する。
- 3) 北朝鮮からの避難学生の収容：巨済島一帯の避難学生を特設クラスに収容し、中等学校の学生は、巨済と河清、統営中学校に分教場を設置、収容する。
- 4) 都市避難学校の設置：ソウル所在中等学校の避難学校の設置、避難国民学校の分教場を設置、運営する。
- 5) 戦時連合大学の設置：釜山で発足（1951年2月）し、次第に光州、全州、大田へ拡大、各大学間共同で学校を運営する。
- 6) 煉瓦校舎の建築：煉瓦建築委員会を組織（1951年6月）し、戦争で焼失した教室を新築する（1951年末まで慶南288、慶北94、忠南16、忠北12の教室を新築する）。
- 7) 臨時校舎1千教室建築計画：戦争で露天授業をしている学校に仮教室（米8軍から建築資材を援助される）を提供する。
- 8) 戦時教材の発行：文教部は、戦時生活を指導できる戦時教材を学生に提供するために、国民学校用「戦時生活」の1・2学年用、3・4学年用、5・6学年用など、3回にわたって発行し、教師用として「戦時学習指導要綱」を作成、提供した。また、中等学校用「戦時読本」を3回にわたって発行・配布した。

<sup>45</sup> 吳天錫『韓国新教育史』現代教育叢書、1964年、451～453頁。

このように「戦時下教育特別措置要綱」は、戦時体制下における戦時教育を行うための非常教育方針として学校・学生に適用された。

1953年、白樂濬文教部長官は、この教育方針を拡大し「自活人の養成（個人）、自由人の養成（国民）、平和人の養成（国際人）」を戦時下3大目標<sup>46</sup>として掲げた。また、この教育目標を具現化するために「知識教育、技術教育、道義教育、国際教育」の4大重点教育方針を強調した。何よりも「特別措置要綱」は、戦争勃発のために非常教育対策であった特殊性がある。これに基づいた施策なども相次ぎ発表されたが、その大概は、反共イデオロギーの構築としてまとめられる。韓国の教育課程・教科書の歴史において、反共イデオロギーを全面的に強調し始めたのも、この頃からだった。こうした流れは、80年代の第5共和国（1981年3月～1988年2月）時期まで継続された。

また、戦時下であったため、すべての教授・学習活動が臨時的に行われるしかなかった。このような状況の中でも、国民学校の場合、【表7】のような科目編成と授業時数が定められたが、事実上適用されない場合が多かった。中等学校の場合、科目編成の記録が現在に残っていないが、おそらく同じ状況であったと考えられる。

【表7】戦時下における科目編成と授業時数（一年）

科目 \ 学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年
国語	245	245	245	245	245	245
社会	140	140	175	175	210	210
理科	—	—	—	140	140	140
算数	140	140	175	175	175	175
保健	35	35	35	35	35	35
音楽	35	35	35	35	35	35
美術	35	35	35	35	男105 女70	男105 女70
家事	—	—	—	—	70	70
合計	630	630	700	840	男945 女980	男945 女980

出典：咸宗圭『教育課程沿革調査前篇』淑明女子大学学校教育問題研究所、1974年、220頁。ジョン・テボム「米軍政期及び教授要目期の教科課程と教科用図書編纂」『韓国編修史研究Ⅰ』韓国教科書研究財団研究報告書、2000年、127頁。なお、授業の1コマは、40～50分である。「—」は空欄である。

<sup>46</sup> 韓国教育十年史刊行会編『韓国教育十年史』豊文社、1960年、145頁。

一方、文教部は、1951年3月30日、「教育課程研究委員会」（文教部令第96号）を公布し、初・中等学校の教育課程を新しく準備するための一種の専門機構をおこうとした。教育課程研究委員会の規程の中で、研究業務に関する内容は、以下のようである。

第2条 委員会は、上記の目的を達成するために、教科目の分析及び統・併合、教材の選定、学習指導計画及び学習指導要領を研究する。

第5条 委員会は、各教科別に分科委員会をおく。各分科委員会は、担当の教科目の教材の選定、学習指導の要綱、計画及び要領を研究する。<sup>47</sup>

この委員会が本格的に稼働し始めたのは、発足後の2年が過ぎた後であった。1953年3月11日に、初の「教授要目制定審議委員会」<sup>48</sup>を招集するが、これによって、翌年の第1次教科課程の公布（1954年4月20日）の礎を整えることとなった。

#### 4-2 朝鮮戦争期における教科書

朝鮮戦争期における国語科教科書は、1951年8月に最初に発行され、休戦（1953年7月）を経て1955年9月まで発行が続けられた。特にこの期間に発行された教科書の奥付には、「国際連合韓国再建委員団（UNKRA）」<sup>49</sup>の支援に対する第2代文教部長官である白樂濬の感謝文と署名が載っている。そのために、この教材は、「ウンクラ教科書」という別称が付けられた。感謝文は、以下のとおりである。教科書には、英語と韓国語で書かれている。

The United Nations Korea Reconstruction Agency donated to the Ministry of Education of the Republic of Korea, 1540 tons of paper to print text books for primary and secondary schools in Korea for 1952. The paper of this book is printed out of that donation. Let us be thankful for this assistance, and determine to prepare ourselves better for the rehabilitation of Korea. L. George Paik Minister of Education Republic of Korea

국제 연합 한국 재건 위원단(운크라)은 한국의 교육을 위하여 4285 년도의 국정 교과서 인쇄용지 1,540 톤을 문교부에 기증하였다. 이 책은 그 종지로 박은 것이다. 우리

<sup>47</sup> イ・ジョングク『韓国教科書の変遷史』大韓教科書株式会社、2008年、153頁。

<sup>48</sup> 第1次会議を釜山師範学校の講堂で開催した。この会議で、文教部が提出した議題は、「①教育課程改正の基本方針、②教授要目改正の基本態度、③国民学校教科課程時間配当基準表、④中学校教科課程時間配当基準表、⑤高等学校・師範学校教科課程時間配当基準表であった」（文教40年史編集委員会編『文教40年史』大韓教科書株式会社、1988年、167頁。

<sup>49</sup> 「国際連合韓国再建委員団（UNKRA）」：United Nations Korean Reconstruction Agency。1950年の国際連合総会の決議で、韓国の掲載復興と再建のために創設された援助機関である。

는 이 고마운 원조에 감사하는 마음으로, 한층 더 공부를 열심히 하여, 한국을 재건하는 훌륭한 일군이 되자. 대한민국 문교부 장관 백낙준

国際連合韓国再建委員団（ウンクラ）は、韓国の教育のために、4285年度の国定教科書の印刷用紙1,540トンを文教部に寄贈した。この本は、その紙で印刷したものである。我々は、この有難い援助に感謝する心で、もっと頑張って勉強をし、韓国を再建するたくましい労働者になろう。大韓民国文部長官 ペク・ナクジュン

この時期の教科書は、2年間（1952年1月～1954年3月）の無償支援を受けてから、一度だけ1954年9月に有償支援を受けて発行されたものである。各発行においては、大きな差異はないものの、部分的には修正が行われていた跡が見られる。この時期の教科書は、前の時期の教材をそのまま採択していた。作者とタイトルもほぼ同様であるが、それにいくつかの教材を新しく追加しているだけであった。おそらく、予想もしていなかった戦争という現実の中で、教科書を全部改編する時間的・物理的な余裕がなかったと考えられる。

#### 4-3 朝鮮戦争期における戦時教材シリーズ

戦時教育が教科書も無く、生活中心とした教育としてスタートした際に、文教部は教科書問題を解決し、戦時生活を指導しようと戦時教材『戦時生活』、『戦時読本』を発行し、国民学校と中学校に提供した。教師のためには「戦時学習指導要領」を作成・提供した<sup>50</sup>。

【表8】初・中等学校用戦時教材

区 分		1 集	2 集	3 集	印刷所	初版発行
初 等 学校用	戦時生活 1	飛行機	タンク	軍艦	合同図書株式会社	1951.3.25
	戦時生活 2	戦う我が国	我々は必ず勝つ	たくましい我が民族	合同図書株式会社	1951.3.25
	戦時生活 3	我が国と国際連盟	国軍とUN軍はどのように戦うのか。	我々も戦う	教学図書株式会社	1951.3.6
中 等 学校用	戦時読本	侵略者は誰なのか？	自由の闘争	民族を救出する精神	教学図書株式会社	1951.3.6

出典：各教科書より作成。

このように、戦時教育体制という中央集権的な統制を加え、その一環として戦時教材を制作し配布したが、当時、教材の編纂は、崔鉉培を編修局長として、編修官である崔秉七、崔台鎬、洪雄善の3人であった。彼らによって作られた教科書が、戦時の特殊状況を反映

<sup>50</sup> 韓国教育十年史刊行会編、前掲書、1960年、136頁。

した国民学校用の『戦時生活』1、2、3と中学校用の『戦時読本』1、2、3である。この戦時教材は、教科目の区分はせず、それ自体が国語科でありながら同時に社会生活教科書の役割をしたが、主に戦争と反共の正当性を説明し、戦争を支援することに積極的に参加すべきと促す内容であった。上記の【表8】は、初等学校・中等学校用の戦時教材のリストであるが、初版は、朝鮮戦争勃発の1950年6月25日から約9か月後の発行となっている。

ここでは、朝鮮戦争期の戦時教材の中でも、初等学校用の『戦時生活』1～3の中で、現存している『飛行機』、『軍艦』、『我々は必ず勝つ』、『たくましい我が民族』、『我々も戦う』を紹介しておきたい。なお、この戦時教材については、現在までに先行研究がほとんどされておらず、発掘の段階である現状もあり、本稿では明記すべき事項を紹介しておき、詳細な分析などは今後の課題とすることをお断りしておきたい。

#### 4-3-1 『戦時生活 1-1 飛行機』

初等学校用<sup>51</sup>の『戦時生活 1』の第1集として発行された『飛行機』は、「飛行機 1」、「飛行機 2」、「飛行機 3」という単元構成である。物語には、ヨンイとチョルスという小学生が登場し、飛行機を題材として戦時状況を伝えている。最後の単元においては、UNの他、朝鮮戦争に参戦したUN軍国家の国旗を紹介している（『飛行機』18～22頁）。なお、最後の奥付にある項目と、「指導上注意」について取り上げておく。

- ・檀紀4284（1951）年3月20日印刷、3月25日発行。
- ・価額：避難学生には無料で提供。
- ・著者及び発行：文教部。
- ・印刷：合同図書株式会社 代表者 ヤン・イヨン
- ・指導上注意

この教科書は、飛行機を主題として子どもの生活を発展させようとする趣旨をもって編纂されたものである。

1. 読解力がついていない1年の学級（とりわけ、戦災地区）においては、絵を見せることを主とし、自由に話ができるようにさせ、教材は、必要に応じて教師が読んであげること。文字を無理やりに教えようとしないこと。
2. 読解力がついた1年生及び2年生の学級においては、その程度に合わせて、国語科教科書として指導すること。

#### 4-3-2 『戦時生活 1-3 軍艦』

初等学校用の『戦時生活 1』の第3集として発行された『軍艦』は、「軍艦 1」、「軍艦 2」、「軍艦 3」という単元構成である。物語には、ヨンイとチョルスの他、父親や母親が

<sup>51</sup> 戦時教材の表紙には、「国民学校 1・2 学年」と明記されている。

登場しており、国軍の海兵隊が元山に上陸する写真が載っている新聞を取り上げながら、ソウルを奪還したなどの戦時状況を説明している（「軍艦2」12～19頁）<sup>52</sup>。最後の奥付にある項目と「参考」は、以下のとおりである。なお、奥付の「参考」には、判読不明な箇所があるが、ここでは「××」と表記する（以下、同様）。

- ・ 檀紀4284（1951）年3月20日印刷、3月25日発行。
  - ・ 価額：330ウォン。道庁から学校までの運賃は別に徴収。
  - ・ 著者及び発行：文教部。
  - ・ 印刷：合同図書株式会社 代表者 ヤン・イヨン
  - ・ 参考  
この教科書の指導上注意は、第1集の要領と同様だ。  
この本は、戦時版であるため、××きちんとできていない××次のように製本××。
1. ××。
  2. 46版に合う××。

#### 4-3-3 『戦時生活2-2 我々は必ず勝つ』

初等学校用の『戦時生活2』の第2集として発行された『我々は必ず勝つ』は、「1. 自由を探して」、「2. UNは、我々を助ける」という二つの単元構成である。「自由を探して」は、登場人物のミョンギルが、大邱の叔父の所へ避難する話がメインとなっている。小単元としては、「汽車で」→「大邱で」→「釜山で」の順で避難生活が綴られており、北朝鮮の「平壤」からの避難民であるインスンなども登場している。「春の便り」では、ミョンギルの母親が新聞を読みながら、国軍の進出状況<sup>53</sup>を伝えている。「戦時勉強」という小単元においては、釜山にある国民学校が開校し、学生の実態を説明した<sup>54</sup>。「UNは、

<sup>52</sup> 「軍艦2」、「軍艦3」の最後には、それぞれ詩があげられている。「青い海の上で／大砲の音が響き聞こえます。／／白い波を追い払って／海兵隊が走っていきます。／／山を越え野良を越え／敵を追って進んでいきます。／／敵を撃破し／太極旗を翻って／／勇敢である、海兵隊／万歳！万歳！万々歳！」（「軍艦2」18～19頁）。「私たちも進んでいこう／みんな、出てきて。／私たちも、進んでいこう。／みんな一緒に足を合わせて、前へ、前へ、前へ。／38度線を越えて、北へ、北へ、北へ。／共産軍を撃破して、北へ、北へ、北へ。／／みんな、出てきて。／私たちも進んでいこう。／みんな一緒に足を合わせて、前へ、前へ、前へ。／白頭山を眺めながら、北へ、北へ、北へ。／敵を撃破して、北へ、北へ、北へ。／みんな一緒に足を合わせて、前へ、前へ、前へ。太極旗を高く持って、北へ、北へ、北へ。／愛国歌を歌いながら、北へ、北へ、北へ。」（「軍艦3」28～29頁）

<sup>53</sup> 仁川、ヨンドンボを奪還したが、金浦飛行場に落下傘部隊が上陸したため、ソウル奪還まで後もう少しなどといった話や新しい武器や誘導爆弾などを紹介する話が書かれてある。そして、敵として「金日成」の名前をあげている（13～17頁）。

<sup>54</sup> ソウルや北朝鮮から避難してきた学生らがともに勉強していることを伝えながらも、本来の学校は、軍隊が使用するため、学生たちは野外学校で授業をするなどの実態を説明している（17～20頁）。

我々を助ける」(21～30頁)は、「世界の警察」、「二つの国」、「大韓は輝く」の3つの小単元構成である。ここでは「UNは、世界の様々な国家が、お互いに仲良くなるため、すべての人々が楽しく過ごせるようにするために作られた機関」であると説明し、民主主義国家と共産主義国家の二項対立について明確にしている。なお、最後の奥付にある項目と「参考」は、以下のとおりである。

- ・檀紀4284 (1951) 年3月20日印刷、3月25日発行。
- ・価額：330ウォン。道庁から学校までの運賃は別に徴収。
- ・著者及び発行：文教部。
- ・印刷：合同図書株式会社 代表者 ヤン・イヨン
- ・参考

この教科書の指導上注意は、第1集の要領と同様だ。

この本は、戦時版であるため、××きちんとできていない ××次のように製本××。

1. 針××。
2. 46版に××。

#### 4-3-4 『戦時生活2-3 たくましい我が民族』

初等学校用の『戦時生活2』の第3集として発行された『たくましい我が民族』は、「1. 戦闘機」、「2. 勇敢なる信号兵」、「3. 勝つ道」、「4. 私たちの力で」という四つの単元構成である。「勇敢なる信号兵」(3～13頁)では、アメリカ海兵隊が原州の北側にある514高地を奪還する作戦を紹介し、北朝鮮から来た金一等兵の功労を称えている。「勝つ道」(14～23頁)では、戦争に勝つためには、子どもから大人まで率先して軍隊のお仕事(道を綺麗にするなど)を手伝うべきなどを訴えている。「私たちの力で」(23～30頁)では、クラス会議において、「私たちの力で、1. スギルを助け、安心して勉強できるようにする。2. 国軍と第2国民兵として出た人々の家を助けること。3. 道を直してあげること。を決定し、お仕事をするのに、分団は、6つに分け分団長と相談し、互いにお仕事を分け合うことにする。」など具体的に実践すべき項目を挙げている。最後の奥付にある項目は、以下のとおりである。

- ・檀紀4284 (1951) 年3月20日印刷、3月25日発行。
- ・価額：避難学生には無料で提供。
- ・著者及び発行：文教部。
- ・印刷：教学図書株式会社 代表者 チェ・サンユン
- ・参考

この教科書の指導上注意は、第1集の『飛行機』××。

この本は、戦時版であるため、××きちんとできていない ××次のように製本××。

1. 針×
2. 46版に合うように、紙を切りそろえる。

#### 4-3-5 『戦時生活3-3 我々も戦う』

初等学校用の『戦時生活3』の第3集として発行された『我々も戦う』は、「大韓の少年」<sup>55</sup>というハン・インヒョンの詩から始まり、少国民としての戦時生活を綴った「ヨンギルの戦う日記」<sup>56</sup>、最後の「高潔なる犠牲」<sup>57</sup>というユ・チファンの詩で締めくくっている。なお、この教材の奥付には、指導用の注意や参考などの項目はなく、以下の項目のみである。

- ・檀紀4284 (1951) 年3月1日印刷、3月6日発行。
- ・価額：避難学生には無料で提供。
- ・著者及び発行：文教部。
- ・印刷：教学図書株式会社 代表者 チェ・サンユン

戦時中の用紙の事情こそ、教科用図書の供給にもっとも深刻な問題であった。この問題を少しでも解決できたのは、1951年7月ユネスコから10万ドルのほか、国際連合韓国再建委員会から13万5千ドルの支援金を受け、またサンフランシスコ市から1千トンの紙を支援されてからのことである。ペク・ナクジュン長官が、韓国の戦時教育事情をアメリカ人に知らせた訪米外交として得られた成果であった。また、自由アジア委員会からも「数百万冊の教科書を作る紙」を寄贈されたこともある。

<sup>55</sup> 「半年 長い歴史 受け繋ぎ／輝く 新しい国を 作る私たち。／我々は希望の花 大韓の少年。／我々は 名誉のある 大韓の少年。／東海の あの波が 私たちを呼び／豊かな あの野良が 私たちを呼んでいる。／習おう 一生懸命に 大韓の少年。／育てよう 丈夫な身体 大韓の少年。／ちりも 積もれば 大きな山になり／一滴の雨も 集まれば 川になる。／団結せよ 丈夫に 大韓の少年。／進んでいこう 遅しく 大韓の少年。」(1頁)

<sup>56</sup> 「1月13日(金)：なぜ戦争をしているのかについて。4月14日(土)：慰問手紙、慰問袋など、軍人に送ることについて、クラス会で討議する。4月16日(月)：作業場、村の道をきれいにするために、石などを運ぶ。ジェット機に関する歌について。4月18日(水)：国産の鉛筆を大切に使う。節約や国産愛用運動について。4月21日(土)：陸軍病院へ慰問。慰安会にて合唱、演劇などを披露。慰問品について。」(2～29頁)

<sup>57</sup> 「今日、ある病院の前で、杖に身体を支えながら、歩きが不自由な白い服を来た勇士を私はみた。／彼のズボンの片方は、空中に揺らいでいた。この時、私の頭を過ぎったことは、いつかみたことのある映画であった。／その映画は、あるお母さんが目の見えない息子のために、自分の目をあげるといってお母さんの神聖(高潔)なる犠牲精神を描いた作品であった。／この、足の不自由な勇士は、まるで子どもに自分の目を取り出してあげる映画のお母さんのように、自分の足を犠牲にしてまで、わが祖国と民族のために戦ったことである。／小さい出来物一つも耐えられない我々の身体！その身体の一部を迷わず祖国と民族に捧げたその若い勇士！／神聖(高潔)なる犠牲！／涙で見えなくなって、私は、当分の間、その場所を離れられなかった。」(30頁)

「ウンクラ」などで援助された用紙は、1951年12月から終戦直後まで、国定教科書の発行社に配当され、一部の検定図書の発行社にも配当された。それで、実業系専門教科書側も作ることができ、専門図書発行のための用紙支援も可能となった。これにより、当時の教科書には、韓国の教科書史において最初の事例として、「用紙寄贈に対する感謝文」を掲載した。この文は、教科書の最初のところか、版權面の上段に、ハングルと英文を共に掲載した。

前述した「用紙寄贈に対する感謝文」は、1955学年度から削除（用紙の無償援助が事実上終了）される。このような形式は、朝鮮戦争以後、一時期「我々の誓い」を掲載するほか、その後、「国民教育憲章」を掲載した体制とともに、教科用図書の偏差形式の中で基本要件<sup>58</sup>になることもあった。

【表9】戦時下における教科用図書編纂・発行状況（1951～1953年）

	国民学校用		中・高等学校用		合 計	
	種 数	部 数	種 数	部 数	種 数	部 数
1951	50	13,191,727	12	363,465	62	13,555,192
1952	49	11,045,691	31	837,079	80	11,882,770
1953	54	15,353,595	18	357,500	72	15,711,095
計	153	39,591,013	61	1,558,044	214	41,149,057

出典：イ・ジョングク『韓国の教科書変遷史』大韓教科書株式会社、2008年、153頁。

約3年間にわたった戦争期間は、政府樹立直後から推進してきた教育設計を維持するため、様々な方法を模索したが、力不足になるしかなかったが、「戦時教材」を発行し、国定教科書を最大限に回復させようとした文教部の努力がうかがえる。とりわけ、「戦時教材」は、韓国の教科書史において、米軍政期に発行された一連の臨時教材とともに、もっとも重要な意味を持つ。戦時教材以外に、1951～1953年の国定教科書の発行実態をみれば、【表9】のとおりである。1951～1953年の教科書発行の実態は、前半・後半学期の実績を合算したことである。当時は、中・高等学校の学制をそれぞれ3年に改定する一方、9月新学制を廃止し、3月新学期制に変えたところであった。【表9】を見ると、戦時下であったにもかかわらず、国民学校の教科書は、ほぼ全量が発行されたが、中・高等学校の場合は、もっとも難しい局面であったことがわかる。とりわけ、中・高等学校の場合、朝鮮戦争が勃発する前は、215種にいたる実業専門教科書を発行するという計画であったが、戦争勃発後の3年間の実績は、61種（普通教科書の教科書を含めて）にとどまった。この状態から解除されたのは、1955学年度からであったが、戦時下において、釜山に「避難工

<sup>58</sup> 教科書1020-351（1987年7月31日）及び教科書図書編纂指針による。これによって、1979学年度から1種及び2種の図書の表の表紙と中表紙の間に、「国民教育憲章」を掲載した。1994年11月2日、教育部（1990年12月29日、文教部を教育部に改称）は、同憲章収録を削除（81150-1189）、1995学年度の新改編図書からは掲載しない。

場」を開設していた大韓教科書株式会社によって、20種程度維持されていたという<sup>59</sup>。

#### 4-4 文教部編著『中等国語』1-Ⅰ～3-Ⅱ（1951年8月～1952年9月）

前述したように朝鮮戦争期の教科書は、「国際連合韓国再建委員会（UNKRA）」から紙の援助を受け、発行された。この時期は、教育の条件、教材開発などが、もっとも悪い状況にあり、教科書の版本も4×6判に過ぎない。この教科書は、基本的に学年ごとに1学期と2学期の2種類が存在するが、同学年の両学期に同じ教材が掲載されるなど、教材編制において不安定な状況であった<sup>60</sup>。なお、現在、2-Ⅱは発見されておらず、不明のままである。

【表10～14】は、朝鮮戦争期における『中等国語』の目次である。

【表10】『中等国語 1-Ⅰ』の目次

1 祖国に捧げる歌	5 落ち葉を燃やししながら
2 愛国歌の力	6 暗かった時代
3 ハングル創制の苦心	7 青山里の戦い
4 追憶の一つ	8 南へ行く道

出典：文教部編著『中等国語 1-Ⅰ』教学図書株式会社、1951年8月31日。

【表11】『中等国語 1-Ⅱ』の目次

1 祖国に捧げる歌	・補充教材
2 愛国歌の力	1 われわれの誇り
3 ハングル創制の苦心	2 国文だけを書くようにしよう
4 追憶の一つ	3 文をどのようにみるのか
5 落ち葉を燃やししながら	4 山
6 暗かった時代	5 野菊
7 青山里の戦い	6 雪
8 南へ行く道	7 懐かしい時代
	8 人生
	9 人格完成と団結訓練
	10 豆腐商人
	11 万年シャツ

出典：文教部編著『中等国語 1-Ⅱ』大韓文教書籍株式会社、1952年9月30日。

<sup>59</sup> 『大韓教科書史：1948～1998』大韓教科書株式会社、225～226頁。

<sup>60</sup> たとえば、『中等国語1-Ⅱ』の場合、『中等国語1-Ⅰ』と同様の教材に、補充教材を追加する編制となっている。

【表12】『中等国語 2-1』の目次

1 勤勞	10 詩4編
2 韓国学生の精神	心、青鹿、空、血で洗った地域
3 国産奨励	11 蟾津江水力電気工事
4 息子へ	12 新聞社説
5 満庭桃花	13 韓国を愛したウォン・ハンギョン博士
6 森の徳	14 エイブラハム・リンカーン
7 春風に千里を行く	15 シンプロン峠を越えて
8 新羅の文化	16 三防の山奥
9 扶余に行く途中で	17 盲人の知恵
	18 海

出典：文教部編著『中等国語 2-1』大韓文教書籍株式会社、1952年9月30日。

【表13】『中等国語 3-1』の目次

1 懐かしさ	12 文字について
2 青春礼讃	13 実用手紙
3 殉国少女 ユ・グァンスン	14 訳詩4編
4 論介	種を蒔いた頃の夕方
5 新羅の花郎制度	私の耳は
6 安昌浩	秋の歌
7 李允宰先生の墓碑文	石榴
8 ホオジロの卵	15 江西の三古墳
9 五友歌	16 赤壁遊
10 芭蕉	17 渡江録から
11 言葉を綺麗にしよう	18 青い蛙

出典：文教部編著『中等国語 3-1』大韓文教書籍株式会社、1952年1月31日。

【表14】『中等国語 3-II』の目次

1 国軍は死んでから語る	5 菊の花
2 懐かしい大同江	6 私の革命時代の日記
3 農家月令歌	7 元術郎
4 月の夜	

出典：文教部編著『中等国語 3-II』大韓文教書籍株式会社、1952年9月30日。

#### 4-5 文教部編著『中学国語』1-1～3-II（1953年3月～1955年9月）

1951年学制の改変以後、『中等国語』が『中学国語』に変更される。この教科書は、1学期用は朝鮮戦争中の1953年3月に、2学期用は朝鮮戦争・戦後期の1953年9月に発行さ

れる。初めて単元別編制をしたことから、教科書開発の発展がみられる。既存のいくつかの課を中単元にまとめ単元の紹介文をおいた。1954年以後の発行本には、単元の紹介文が全部揃えられているが、1953年発行本には紹介文がないものも見られる。なお、各1・2学期に分け、全6巻体制で刊行された。形式上の特徴は、以下のようにまとめられる。

1. 各単元の前に、単元紹介文と解説が設けられている。
2. 「練習問題」や「学習」などの項目は、設定されていない。
3. 漢字は、括弧の中に書かれている。

【表15】は、『中学国語』（1953年3月～1955年9月）の単元である。

【表15】『中学国語』（1953年3月～1955年9月）の単元

学年・学期	1 学年	2 学年	3 学年
1 学期 1953年 3月31日発行	I 日常語の反省	I 詩の世界	I 思索を書いた文章
	II 楽しい追憶	II 紀行文を読もう	II 詩を読もう
	III 花を見る心	III シナリオとドラマ	III 紀行文を読もう
	IV 感想文	IV 新聞の文章	IV 小説を読もう
	V 我が国語		V 古典を読もう
2 学期 1953年 9月15日発行	VI 祖国愛	V 季節の感覚	VI 実用手紙
	VII 美しい物語	VI 文章の種類	VII 言葉と文字
	VIII 論説文を読もう	VII 伝記を読もう	VIII 回想
	IX 話し言葉	VIII 息子に送る手紙	IX 戯曲
	X 簡潔な表現	IX 論説文を読もう	X 追悼文
			XI UNと我が国

出典：文教部編著『中学国語』1 - I ~ 3 - II、大韓教科書株式会社、1953～1955年。1953年度版は（ガ）、1954年度版は（ナ）、1955年度版は（ダ）とされているが、1955年度版は『中学国語 1 - II』（1955年9月）だけが確認されている。

## 5 「国民作り」と教科書

朝鮮半島に2つの国民国家が樹立された後に内戦のような性格を持って展開された朝鮮戦争（1950年6月25日～1953年7月27日）は、国民形成と国内平定がその目的とされる戦争であった。戦争を前後してなされた国民的統合を可能にしたもっとも重要な社会的な規制は、義務教育制度と「国民皆兵制度」<sup>61</sup>の定着である。これらの制度が決定されたのは朝鮮戦争前であったが、実際に施行されたのは戦時中や戦争後である。このような点か

<sup>61</sup> ある一定の年齢になったら、一定期間に軍に服務させる義務兵役制度。韓国の場合、憲法第2章39条で、兵役法を制定した1949年から国民皆兵制度を実施している。韓国の18歳以上の男子は兵役義務者となる。

らも朝鮮戦争は、国民形成戦争としての性格を持っていると言われている<sup>62</sup>。義務教育は、1949年12月31日付で新教育法が公布され、1950年6月1日付で全面的に施行される予定であったが、戦争によりすぐに実行できなくなった。戦争終結の直後、1959年までの就学率を98%まで上げさせる目標であった「義務教育完成6カ年計画」（1954～59年）が立案され、1954年の就学率が82.5%、1959年96.4%に至るなど義務教育制度は次第に定着段階に入る。学校や軍隊は、一種の新しい「通過儀礼」として作用しながら、「国民」としてのアイデンティティを確立させる核心的な制度として作用した。彼らは、国民学生と国民兵となり、国家は冷戦反共主義という国家理念を安定的かつ体系的に教育し、国民的価値観の伝道師としての役割を果たすことになる<sup>63</sup>。

### 5-1 「人民」から「国民」へ

朝鮮戦争を前後して「国民」は、「想像の共同体」の主体であり、学校教育の絶対的な支配用語として登場する。周知のように、「国民」は冷戦時代の「国家主義」を支えるものであった。1948年8月の大韓民国政府樹立以前には、学校で「人民」と「国民」を鮮明に区別していない。大韓民国の憲法には、「人民」と対立した「国民」を使用していたが、まだ教科書には、「人民」という用語が使われていた<sup>64</sup>。

建国期初期の教科書においては、まだ「人民」が問題とされており、ひたすら親日派が問題となっていた。親日派の問題は、解放後韓国においてはもっとも重要な主題であった。解放後、親日派清算の雰囲気の中で、「人民」が自然と登場することができたというなら、親日意識に根を下ろしていた「国民」は、分断イデオロギーの中でその本性と寿命を安全に保証される。

たとえば、【表16】のように、国語科教科書の中では、人民・朝鮮から、国民（一民）・韓国へとすりかえられる変化が見られる。こうした変化は、主に1950年の朝鮮戦争の前後に行われた。また、人民から国民への過程は、次のようなエピソードを持っている。兪鎮午の備忘録<sup>65</sup>に表れた制憲当時の最大争点は2つで、1つは、用語に関することで、もう1つは権力構図に関することであった。まず、制憲議員の間で行われた論争は、英語の

<sup>62</sup> ユン・ヘドン『植民地近代のパラドックス』ヒューマニスト、2007年、137頁。

<sup>63</sup> ユン・ヘドンによると、この頃（1958年まで）は、「文盲（非識字）退治」事業も国家的力点事業の1つとして推進された。李承晩政府は、全国の非識字者を200万人程度と推定し、1954年3月、第1次非識字根絶運動に着手した。非識字者は、国家との直面的な対面を通じて、国民というアイデンティティを実感できるきっかけとなり、非識字根絶教育の中で公民的な知識も教育された。ユン・ヘドン、同上書、2007年、138頁。

<sup>64</sup> 朝鮮戦争が終わった1955年にも「人民」を使用している。中学校用『新しい道義』には、リンカーン（A. Lincoln）の演説を次のような題目で強調している。「人民の、人民による、人民のための政府は、地上で滅亡されてはならない」、アム・ハンヨン、キム・ジュンソプ、チェ・ビョンチル共著『新しい道義』修文閣、1955年、71頁。

<sup>65</sup> 「憲法制定当時の二大争点」『中央日報』1998年7月17日付。

ピープル (people) を「人民」と「国民」の中で、どれにするかということであった。この備忘録によると、1948年6月の初め、国会憲法基礎委員会に提出された憲法草案には、一貫して「人民」という用語が使用されていた<sup>66</sup>。

【表16】朝鮮（人民）→大韓（国民）

著者・教材使用年	教材名	用語変更
安昌浩 1947～1981年	「人格完成と団結訓練」	朝鮮青年諸君 1947年 大韓青年諸君 1955年
	「学生 of 精神」	学生 of 精神 1947年 韓国学生 of 精神 1952年
崔鉉培 1948～1973年	「言葉をきれいにしよう」	朝鮮 1948年 わが大韓 1952年
	「文字と文化」	わが朝鮮の人 1948年 わが大韓の人 1955年
安浩相 1949～1955年	「学生と思想」 1949年	大韓民族、大韓の人々
	「勤労」 1952年 「知ること」 1953年 「勤労と幸福」 1953年	我々は一民
孫晋泰 1952～1955年	「一民主義」 1952～55年	わが大韓民族、わが民族、 一民、民族一民主義

出典：『中等国語教本』（上・中・下）、『中等国語』（1、2、3）、『中等国語』（1-I～3-II）、『中学国語』（1-I～3-II）より作成。

しかしながら、当時は世界各地において、共産主義者との対立が激しかったため、制憲議員らは結局「国民」を選択するようになった。兪鎮午は、回顧録において、「「国民」は、「国家の構成員」という意味で、国家優越主義のイメージがある反面、「人民」は、「国家もむやみに侵害することができない自由と権利の主体」を意味する」とし、「共産主義者らに良い単語の1つを奪われた」とためらったという。このように、「国民」は分断イデオロギーのために政治的に選択されたとも言える。この時から、共産主義者が自称する「人民」と対立され始め、韓国社会のすべての国家的道徳の基本も「国民」からスタートされる。そして、2つのイデオロギーが衝突した朝鮮戦争以後、「国民」は「反共」を、「人民」は「容共」を同時に隠喩することになる。

<sup>66</sup> たとえば、「韓国の主権は人民にあり、全ての権力は人民から生まれる」（第1章第2条）などが挙げられる。

## 5-2 「反米」から「親米」へ

周知のように、冷戦体制下においてアメリカは、覇権国家としての地位を確保するために共産陣営と対決すると同時に、同盟国に対する影響力を維持・拡大せざるを得なかった。このために、アメリカが選択した主要な対策の1つが、同盟国に自分たちの権力を「内面化」させることであった。これについて、ホ・ウン<sup>67</sup>は、「アメリカは、韓国社会が政治、軍事、経済、社会、文化の各分野において、自国を指導国として受け入れさせるために、様々な事業を推進してきた」とし、とりわけ、「米軍政期から韓国社会の個々人の身体と生活様式に具体的な関心を表明し、病気から個人の健康を保護することが、一国に極限された思案ではなく、国家間の関係とも密接な関連を結んでいるとみなしていた」と指摘している。また、韓国社会における個々人の身体に対するアメリカの活動を大きく2つの方式に区分<sup>68</sup>しているが、アメリカが持つ権力は、様々な媒体を通じて、韓国社会や韓国人の中において広げられていった。当然のことながら、その媒体には、教科書（教育）も含まれている。アメリカを称えるような教科書に変貌するようになったのは言うまでもなくその背景には朝鮮戦争がある。韓国社会における根強い生命力を発揮しているアメリカのイメージは、朝鮮戦争と不可分な関係を結んでいる。朝鮮戦争は、戦後韓国社会における1つの対米観を一方向的に通用させることに貢献したのである。共産国の侵略を防ぎ、援助物資を提供し、戦後韓国社会の再建に力を貸してくれた「血盟国家」というアメリカ像が韓国人の意識の中で、強く位置づけられるようになった。

国語教科書では、アメリカと連合軍やUNに関する教材は、朝鮮戦争後も継続して登場しているが、世界平和のために貢献するアメリカの努力・援助のことが強調されている。こうした意識は、当時、韓国政権の国際情勢に関する立場を反映しているものでもあった。たとえば、代表的な単元に「UNと我が国」が挙げられる。この単元は、「UNの根本精神」（『中学国語3-II』、222～225頁）、「UN憲章と韓国」（『中学国語3-II』、225～228頁）、「韓国はUNの前進基地」（『中学国語3-II』、229～231頁）の3つの教材で構成されている。たとえば、「戦争を防止し、全世界を通して侵略行為を抑制する」（「UNの根本精神」、224頁）というUNの設立目的を説明し、「我々はUNの原則下に生きてお

<sup>67</sup> ホ・ウン『アメリカのヘゲモニーと韓国民族主義—冷戦時代（1945～1965）の文化的境界の構築と亀裂の同伴—』高麗大学校民族文化研究院、2008年、141～145頁。

<sup>68</sup> 「第一は、直接身体を媒介とし、アメリカが個人と権力関係を樹立する方式である。支配に服従する個人を作るのに身体に対する規律が大きな役割をすれば、その権力関係を早く、そして明確に韓国人に認識させる方法は、身体に関して、直接接触を通じて「監視—被監視」の関係を樹立することである。このような関係の形成は、戦時アメリカの保健衛生活動を盛り込んだ写真を通じて具体的に確認できる。第二は、いかに大規模の米軍であるとしても、アメリカが韓国人の身体を一々直接統制することは現実的に不可能なことであった。それで、アメリカは、チラシ・ポスター・映画など様々な媒体を通して、韓国人との間接的な接触を最大に広げていった。この媒体の中にある写真・絵などは、アメリカが持つ権力を視覚的に伝達する役割をした」（ホ・ウン、同上書、2008年、142頁）。

り、わが国民はUNの原則の下に命を奉げている」(「UN憲章と韓国」、226頁)としながら、韓国とUNの関係を言及している。なお、「国際連合は韓国を捨てないし、韓国は国際連合を捨てない。国際連合と韓国がこのように固く団結している前で、敵は自滅の穴を掘る日が来る」(「韓国はUNの前進基地」、231頁)とするなど、戦争時はただUNに希望を託すしかなかった現実を教科書の中で綴っている。UNという国際連合機構が作られた後、国際紛争を解決するためにその強い力を発揮した最初の戦争が朝鮮戦争であり<sup>69</sup>、その直接的な「恵み」を受けた側が韓国であったことは否定できない。

【表17】『中等国語』、『中学国語』における戦時教材とUN関連教材

戦時教材：1952～1955年	UNと我が国：1953～1955年 <sup>70</sup>
「戦時国民生活を実践しよう」：1952～1954年 「従軍記者の手帳」：1953～1955年 「弾幕を破って」(「明け方の決戦」、「自由を探して」、「立派だ！わが国軍」、「銀翼に輝く太極」、「敵の血で洗った地域—ソウル再奪還の日に—」)：1954～1955年 「愛国歌の力」、「戦線の朝」、「祖国に捧げる歌」、「国軍は死んだ後に語る」：1953～1955年	UNと我が国 「UNの根本精神」、「UN憲章と韓国」、「韓国はUNの前進基地」：1953～1955年

出典：『中等国語』1-I～3-II、『中学国語』1-I～3-IIより作成。

既述したアメリカの「血盟国家」のイメージは、アメリカが戦争に介入したことで自動的に作られたものではない。これは、戦時下のアメリカの様々な宣伝・広報機構によるアメリカのイメージを作るための意識的な活動の結果物でもあった。とりわけ、アメリカと自由陣営を、近代文明を伝播するための正義溢れる戦争の主導者としてイメージさせることであった。アメリカは、韓国社会の個々人に権力を貫徹させるために、朝鮮戦争を文化宣伝の空間として活用したのである。

なお、【表17】にある戦時教材の中で、「愛国歌の力」においては、国軍は善であり、人民軍は悪として描かれている。善・悪の形態として「南韓」、「北韓」の二分法的に区分して反共意識を先鋭化している。「弾幕を破って」<sup>71</sup>は、「明け方の決戦」、「自由を探して」、「立派だ！わが国軍」、「銀翼に輝く太極」、「敵の血で洗った地域—ソウル再奪還の日に—」の5つの教材で構成されており、韓国軍の勇猛さや朝鮮戦争に参加したアメリカ軍を賞賛する親米的な性向などが露骨に表象されている。たとえば、「洛東江の流れ」では、亡くなった戦友の墓に十字架を立て、冥福を祈る米軍兵士の姿をもっとも誠実な人として

<sup>69</sup> カン・ジンホ、前掲論文、2007年、171頁。

<sup>70</sup> 「UNと我が国」という単元とその中に掲載されている3つの教材は、『高等国語1-II』(文教部、1952年4月25日発行、111～119頁)にも掲載されている。

<sup>71</sup> 文教部「新聞の文章」『中学国語2-I』1953年、79～115頁。

描いており、「UN軍勇士たちに対して、国民は、熱い感謝と熱狂的な歓迎をしなければならぬ」と述べている。このように当時、朝鮮戦争の主導権を握っていたアメリカに対する親米傾向は、反共主義に対する敵対心と表裏を持って表現された。

教科書における反共主義は、抽象的な立場からの「共産主義反対」ではなく、「現実的に存在する敵に対する対応論理」<sup>72</sup>から出発したものとして位置づけられた。また、毛允淑の「国軍は死んだ後に語る」<sup>73</sup>、柳致環の「敵の血で洗った地域—ソウル再奪還の日に—」<sup>74</sup>などの文学テキストを扱っている戦時教材は、戦争の惨状を告発し反共主義を徹底させる仕組みとして活用されたことが明確であるが、これらの朝鮮戦争期における文学テキスト（主に詩）の採択は、文学教育の重要性に対する認識からきたものではなく、戦時教材として、ただ反共主義のために用いられた美学的道具に過ぎないものであったことがわかる。

【表18】『中学国語』（1956年3月～1957年9月）の単元

学期・学年	I 学年	II 学年	III 学年
I 学期 1956年 3月31日 発行	I 国語生活	I 詩の世界	I 演説・討論
	II 日記	II 紀行文	II 素材と表現
	III 見たまま感じたまま	III 電話と放送	III 読書
	IV 本が繋いでくれる橋	IV 映画とシナリオ	IV 我が国の古典(I)
	V 唄う心、詩	V 伝記	V 我が国の古典(II)
	VI 情のやり取り、手紙	VI 会議	VI 規約・法文
II 学期 1956年 9月30日 発行	VII 朗読と発表	VII ハングル	VII 演劇
	VIII 説明と論説	VIII 効果的な文章表現	VIII 実用文を書く
	IX 楽しい会話	IX 読書生活の手引	IX 小説
	X 文集	X 新聞と雑誌	X 国語問題

出典：文教部『中学国語』1-1～3-2、大韓教科書株式会社、1956年。同様の教科書が、1957年にも発行されている。

<sup>72</sup> バン・グムダン 「『国語』教科書に表れた民族主義具現の様相」、カン・ジンホ他、前掲書、2007年、190頁。

<sup>73</sup> 文教部「詩を読もう」『中学国語 3-I』1953年、28～42頁。

<sup>74</sup> 文教部「詩の世界」『中学国語 2-I』1953年、1～7頁。

## 6 建国期以降における国語科教科書

### 6-1 文教科編著『中学国語』1～3（1956年以降）

この『中学国語』は、1955年8月1日に、第1次教科課程が制定・公布され、これにより編纂されたもので、教育課程に基づきその目標と内容に依拠して発行された最初の国語科教科書である。そして、初・中・高等を合わせて、初めて「教師用書」が開発された時期の教科書である。各学年に1・2学期の教科書が作られる。

1. 1950年代前半にあった単元紹介文と解説が、この時期になってなくなる。
2. 各教材（小単元）に、「学習問題」が設けられる。
3. 「註」がある。「註」に関する理解と「註」を付ける学習までに発展させた。
4. 本文は編纂者により、添削などが行われ、原作者の名前は表記されていない。

【表18】は、第1次教科課程期における『中学国語』（1956年3月～1957年9月）の単元である。

前述したように、イ・ウンバクが指摘した「教科書が揃えるべき条件」である言語活動と単元別編制は、1953年発行の『中学国語』から導入された。なお、既述した各教科書の単元からもわかるように、読む領域のみならず様々な言語活動教育を重視することになったのは、1956年発行の『中学国語』からである。

#### まとめ

本稿では、建国期韓国における国語科教科書の特徴について検討した。解放直後、南朝鮮は米軍政庁の管轄下に置かれ、様々な改革が行われた。とりわけ、教育再建は重要な課題であったが、教科書開発や制作に関しては、朝鮮語学会に委託するようになる。米軍政庁の依頼を受けた朝鮮語学会は、国語学者及び教育関係者で「教材編纂委員会」を構成し、解放後初の中等国語科教科書である朝鮮語学会編著『中等国語教本』（上・中・下）などの国語科教材を発行する。この『中等国語教本』は、1948年の建国前後に存在した左右対立という混乱した状況の中で、左右作家のテキストがともに掲載された点から、前代未聞の左右合作教科書として評価されている。

他方、1948年の大韓民国樹立や1950年の朝鮮戦争勃発とともに、韓国の国語科教科書における国家イデオロギー教育はますます強化されていく。新国家が誕生するとともに、国語科も「教本」時代から『中等国語』、『中学国語』の時代を迎えることになり、形式編制にはその変化が見られるようになった。しかしながら、テキストの内容編制においては、戦時中のアメリカを中心とした「国際連合韓国再建委員団（UNKRA）」の支援の影響から親米的な傾向が見られるテキストが増えた。また、朝鮮戦争期における『飛行機』、『軍艦』、『我々は必ず勝つ』、『たくましい我が民族』、『我々も戦う』などの戦時教材からの当時の戦時状況・実態がうかがえる。なお、初代大統領の李承晩や初代文教科長官の安浩相が主張したファシズム的傾向を持つ政治理念である「一民主義」意識の下に置かれ、「人民」が「国民」へとすりかえられるなど、本格的に「国民作り」のための教科書が次々と

開発される。このように、韓国の建国期における国語科教科書は、国家の政治理念を教育するイデオロギー装置の役割を果たしていくようになる。

〔付記〕

本稿は、日本比較教育学会第50回全国大会（2014年7月13日、於・名古屋大学）にて、「朝鮮戦争期における戦時教材研究—初等学校の『戦時生活』シリーズを中心に—」というタイトルで個人発表したものであり、科学研究費・若手研究（B）「戦争と教科書—朝鮮戦争期における『戦時教材』シリーズを中心に—」（課題番号：26780487、平成26～27年度）の研究成果の一部である。

なお、建国期における教育課程および教科書については、拙書『「国語」を再生産する戦後空間—建国期韓国における国語科教科書研究』（三元社、2013年）の第2章・第3章から多く引用した。